



日本学士院ニュースレター

2017. 10 No. 20



第 107 回授賞式で塩野 宏院長から日本学士院賞を授与される奈良澤由美城西大学教授

平成 29 年 6 月 12 日、第 107 回授賞式を挙行政し、9 件 10 名の方々に授賞を行いました。奈良澤氏は、女性で 9 人目の受賞者となります。(関連記事 2 ～ 5 ページ)

目次

第 107 回日本学士院賞授賞式	2	新第 2 部部長の選定	9
会員寄稿 (堀 幸夫会員)	6	『学問の山なみ』から 一歴史をつくった会員 ..	10
学士院の歩み	7	第 67 回公開講演会のお知らせ	11
第 66 回公開講演会レポート	8	第 10 回学びのススメシリーズ講演会のお知らせ .	11
JPTower 学術文化総合ミュージアム「インター メディアテク」特別展示のお知らせ	8	会員・客員の逝去	12
Madeline H. Caviness 教授講演会のお知らせ ..	9	会員の近刊紹介	12
第 12 回日韓学術フォーラム	9	編集後記	12

第 107 回日本学士院賞授賞式

天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、平成 29 年 6 月 12 日（月）に第 107 回授賞式を本院会館（東京・上野公園）で挙行了しました。本年は、恩賜賞・日本学士院賞 1 件 1 名、日本学士院賞 8 件 9 名の計 9 件 10 名の方々に授賞を行いました。（所属は受賞当時）

恩賜賞・日本学士院賞

「沈み込み帯のテクトニクスに関する地震学的研究」

長谷川 昭（東北大学名誉教授）

日本学士院賞

Les autels chrétiens du Sud de la Gaule (V^e - XII^e siècles)

（『南ガリアのキリスト教祭壇：5 世紀から 12 世紀まで』）

奈良澤 由美（城西大学現代政策学部教授）

『草の根グローバリゼーション—世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』

清水 展（京都大学名誉教授）

「B 中間子系における C P 対称性の破れの研究」

高崎 史彦（高エネルギー加速器研究機構名誉教授）

「量子ドットとその光素子応用に関する研究」

荒川 泰彦（東京大学生産技術研究所教授）

「メゾスケール力学に基づく材料の疲労および時間依存型強度学の基礎理論とその実用に関する研究」

横堀 壽光（東北大学名誉教授）

「植物病原性細菌ファイトプラズマに関する分子生物学的研究」

難波 成任（東京大学大学院農学生命科学研究科特任教授）

「福山型筋ジストロフィーを含めた糖鎖合成異常症の系統的な解明と新しい糖鎖の発見」（共同研究）

戸田 達史（神戸大学大学院医学研究科教授）

遠藤 玉夫（東京都健康長寿医療センター研究所副所長）

「心臓外科新領域の開発と普及：小児冠動脈再建手術」

北村惣一郎（国立循環器病研究センター名誉総長）



玄関で天皇皇后両陛下をお迎えする塩野 宏院長



授賞式で式辞を述べる塩野 宏院長



塩野 宏院長から賞状・賞牌を授与される長谷川 昭受賞者



受賞者と水落敏栄文部科学副大臣、日本学士院役員

<受賞者寄稿>

「地震の発生は水がコントロールする？」 東北大学名誉教授 長谷川 昭

地震は、地球内部に生じた応力を解放するために、既存の強度の弱い面（断層面）に沿って、その両側が急激に食い違う断層運動です。地震が発生するのは、加えられた応力が断層面の強度に達したときです。つまり、地震の発生には「応力」と「強度」の2つがキーとなります。

応力を生じる原因は、プレート運動にあります。地球は誕生して直ぐにいったん高温になり、その後は内部の熱を宇宙空間に放出しながら冷却し続けてきました。高温の地球深部から低温の地球表面へ熱を運び宇宙空間に放出するために、地球内部に対流が生じます。この地球内部の熱対流運動のうちの地球表面に現れている部分が、プレート運動です。対流運動の一環として、地球表面を覆っている十数枚のプレートが互いに衝突するなど相対運動をしているため、プレートは変形し、その結果、プレート境界やプレート内部に応力が生じます。

では、断層の強度は何が決めるのでしょうか？どうやら、それを主として決めているのは水（より正確にはH₂Oを主体とする流体）であるらしいことが、分かってきました。断層の強度とは摩擦強度ですが、それは被り圧（その点よりも上にある岩石全体によってかかる圧力）に比例します。従って、深くなると、地震を起こせないほど強度が大きくなってしまはずです。しかし実際には、沈み込み帯において、海溝から沈み込んだプレートの中で深い地震が発生します。これは、強度を下げる何か特別なメカニズムが働いていることを意味します。そ

れを主に担っているのが水らしいのです。沈み込んだプレートは温度・圧力が上がるとそれまで保持していた水を吐き出します。この水が断層面の隙間を充たし高圧になると、断層強度を低下させます。そして、応力の大きさにまで強度が低下すると地震が発生すると考えられます。沈み込んだプレートの中で、吐き出す水の量が多く間隙圧が局所的に高いと推定される場所で選択的に地震が頻発していることを明らかにした最近の我々の研究など、それを示す多くの証拠が得られるようになってきました。さらに、プレート境界や内陸で発生する浅い地震についても、同様に、沈み込んだプレートから吐き出された水が、これらの地震の断層まで上昇してきて断層の強度を低下させていることを示す証拠が得られつつあります。

水の惑星と呼ばれるように、地球はその表面に水を豊富に湛えています。地表だけでなく、地球内部にも海水の数倍の水が蓄えられているという推定もあります。プレート運動（マントル対流）によって、水は地球の表面と内部を循環しているのです。生命誕生には水が必要不可欠と言われますが、プレートテクトニクスも、それが成り立つためには、この豊富に存在する水が必要だとする考え方が有力です。そして実は、地震も、水があるから発生するらしいのです。この点についてさらなる検証に努めるなど、地震発生メカニズムの理解の進展に貢献すべく今後も研究を進めていきたいと思っています。



両陛下に研究内容をご説明する長谷川受賞者



長谷川受賞者と会員

＜受賞者寄稿＞

『草の根グローバリゼーション』で受賞した喜び 関西大学特任教授・京都大学名誉教授 清水 展

私の受賞作『草の根グローバリゼーション』は、フィリピン・北ルソンの先住民イフガオのハパオ村で15年(1998~2013)続けたフィールドワークにもとづく文化人類学の民族誌的研究です。冷戦が終わり、グローバル化が急速に進行する現代世界の一端を、周辺や辺境で暮らす人々の生活のなかで詳細に見きわめ、そこから草の根レベルでの生活世界の成り立ちの変容とそれを引き起こすグローバル化の力について考察しています。

そのためにハパオ村を選んだのは、以下の理由によります。1) 太平洋戦争の末期に総司令官・山下奉文將軍麾下の日本軍主力部隊が3ヶ月ほど立てこもり降伏した地域で、それにより「戦後の平和が降臨した地」。2) 村の棚田はUNESCO世界遺産(1995, Living Cultural Heritage)に登録。3) 人望あるリーダーによる住民の組織化と植林運動(Ifugao Global Forest City Movement)および先住民の自覚と文化復興の推進。4) 日本の小さなNGO(IKGS)と連携して、2001~2008年の間にJICAをはじめ5件総額8,000万円ほどの植林とアグロ・フォレストリーのプロジェクトを実施。5) 木彫り生産(観光土産)の中心地。6) 有名監督キッドラット・タヒミックが植林と文化復興運動のドキュメンタリー映画を数本制作し国際映画祭で紹介。7) 350世帯1,800人の村から170人以上が25カ国に海外出稼ぎ(台湾、香港、シンガポール・・・)、内4分の3は女性。

本書に対しては、「外からのグローバリゼーションの波に対して、内から(村人たちの力)はいかに対峙するか。フィリピン・ルソン島北部ハパオ村の実態をつぶさに考察した、深さと広さを持った労作」との評価をい

ただきました。また、現代社会が等しく直面するグローバリゼーションの進行を、個別具体的な現場で見て考えることを続けてきたこと、そして「コミットメントの人類学」または「応答する人類学」の可能性と責務を自覚して自ら実践してきたことを評価し、励ましていただきました。

今までの文系の受賞者のほとんどが、歴史文書や文献・資料(統計)などに依拠する研究であったのに対し、今年の2人の受賞者の方法はフィールドワーク・臨地調査です。奈良澤博士のお仕事は、フランス地中海沿岸の南ガリアと称される地方に残る、古代末期から中世盛期にかけて造られた総数454点の教会祭壇の悉皆調査にもとづき、「地域的基盤に立つ祭壇類型の体系化に世界に先駆けて試み成功した」ものです。

フィールドワークとは、自ら現地に出かけてゆき、生身の人間や現物と直接に接し、手触りをもって交流し(計測し)、知性・感性・体力・想像力を総動員して相手(対象)を知ろうとする、言ってみれば知的総合格闘技です。もちろん丈夫な身体と基礎体力も必要です。研究対象の社会・文化の総体と個別具体的な事例の深い洞察と理解を通じて、その背後に広がる歴史的・空間的なコンテキスト(世界の成り立ちと広がり)を明らかにしようとする点で、今年の2人の文系受賞者はとても似通った問題意識と方法で研究をしています。

今回の受賞は、私個人の業績というよりも、先人・先輩たちが築き上げてきた膨大な研究の蓄積を基盤とする「フィールドの学」の一つの到達点として評価されたのだと思います。そのことが評価され、とてもうれしいです。



研究資料展示の前に立つ清水受賞者



JICA「草の根協力支援型」による3年間の植林事業の終了時評価のために来訪した調査チームに、現場で説明をするリーダーのロペス・ナウヤック氏(2005年8月13日)

<受賞者寄稿>

「心臓外科新領域の開発と普及：小児冠動脈再建手術」 国立循環器病研究センター名誉総長 北村 惣一郎

心臓を拍動させ続けているのは、心臓の栄養血管である冠（状）動脈です。大動脈から最初に分枝する2本の血管で、3本に分かれて心臓を取り囲んでいます。この血流が全て止まると1～2分で心臓は止まります。血流の一部が止まると心筋梗塞が生じ、小児でも成人でも、重要な死因となります。1970年代には、動脈硬化による成人の冠動脈病変に対して、静脈グラフトを用いたバイパス手術が始まっていましたが、小児に対しては生れつきの冠動脈異常症に対して少数例の試みがなされていたのみでした。

小児と成人で全く異なる点は小児では成長し体が大きくなる、余命が成人の患者より50年以上長いことです。その為、小児の手術では成長に対応できる能力を持ち、かつ、可及的に長持ちする手術法でなければなりません。1つの手術法が「標準的術式」として残るには、20～30年という長い期間の経過を観て、長期間耐えうる手術法かどうかを試されます。

私は小児の冠動脈に瘤と閉塞を生じる0～1歳に多発する川崎病患者に出会いました。心筋梗塞を生じた小児の死亡率は高いもので、社会問題化していました。1970年代後半以降、川崎病小児への手術が開始されましたが、当初は、私達（1975年）も日本の他のグループも、また米国でも足の静脈をバイパスグラフトに利用しました。手術後の経過を観察すると、静脈グラフトは①よく詰まる②成長しない③血管壁が変

性して血栓を生じ、新たな心筋梗塞の原因となる④10年以後に静脈が動脈硬化を生じることが分かってきました。即ち、成長期にあり、余命の長い子供には静脈グラフトは不向きで、現在では用いなくなりました。

一方、1983年に私達が初めて小児に利用した内胸動脈は①体の成長に合わせて長さも太さも成長する②左、右2本の内胸動脈で心臓全体の血流を賄うことができる上に、胸壁や内臓の発育に障害は生じない③血管壁は長期間、変性しない④川崎病に侵されない、等を手術後30年間に渡る観察で証明し、報告して来しました。この優れた内胸動脈の特性から川崎病に対する「The Kitamura Operation」と呼ばれるようになりました。また、この手術は手塚治虫氏の漫画『ブラック・ジャック』にも登場しています。

現在では、川崎病小児のみならず、先天性（生まれつき）の心臓病の冠動脈閉塞や異常症に対しても内胸動脈の応用が広がり、0歳児にも行われる「標準的術式」となりました。私達が始めた手術顕微鏡の利用もヨーロッパや北米で取り入れられ、より精密な手術が可能となっています。内胸動脈を利用する小児冠動脈再建手術 (Pediatric Coronary Artery Bypass Surgery) は特殊な領域ながらも新たな心臓外科の1分野と成り、私達の貢献がその中核をなしています。



北村受賞者夫妻と岸本忠三会員（中央）



来賓に研究内容を説明する北村受賞者

(会員寄稿)

技術と工学

堀 幸夫 会員 (機械工学専攻)

技術の歴史は殆ど人類の歴史と同じくらい長い。人類は太古の昔から、自分たちの役に立つ、自然界にはないものを作って生きてきた。このことは考古学的出土物からも分かる。土の中から古い船や転がり軸受まで見つかるのである。

近代になって、フランスのエコール・ポリテクニーク(理工科学学校、1794年設立)、またスイスの連邦工科大学(1855年設立)等を中心に、技術を支えるべき体系的な知識として成立したのが工学である。設立時のエコール・ポリテクニークに、ガスパール・モンジュ(数学)、ジョセフ＝ルイ・ラグランジュ(数学)ら、当時のフランスの一流学者が名を連ねていたのは、工学にとって幸せなことであった。エコール・ポリテクニークでは、数学、物理学、化学、図学などが重視されたという。

ここで注意しておきたいのは、科学は技術の基礎と云われるが、科学を研究していればひとりでに技術が生まれてくるわけではないということである。科学はあるがままの自然を研究し、その秘密を探求するのであるが、技術は自然界には存在しないものを創造するのである。すなわち技術者は科学等を礎石として、その上に自然界にない全く新しいものを創造するのである。そしてその際、科学に限らず、役に立つものは何でも利用するのである。自動車や飛行機、それらの動力源としてのエンジン、またコンピュータ等は技術の産物であり、いずれも自然界には存在しないものである。そして現在の我々の生活には全く欠かせないものである。コンピュータは数学の研究にすら用いられるという。また技術者が考えるもののなかには「規格」のような、いわゆる現物でないものもあり、これも無くってはならぬものである。

なお技術の問題が逆に科学者にテーマを提供した例もある。ルートヴィッヒ・ボルツマンにおける熱力学の問題、マックス・プランクにおける溶鉱炉の温度測定の問題

昭和2年、東京都生まれ。

東京大学第一工学部機械工学科卒業。東京大学工学部講師・助教授・教授、日本学術振興会常務理事、金沢工業大学工学部教授・金沢工業大学副学長を務める。現在、東京大学名誉教授、金沢工業大学学事顧問。平成23年より日本学士院会員。紫綬褒章受章、日本学士院賞受賞。



題などである。

我が国の工学教育の歴史は、幸いなことに、エコール・ポリテクニークは別として欧米諸国に比べてそれほど遅れずに始まった。工部寮(後の工部大学校)は1871(明治4)年に設立され、多くの優れた人材を輩出したが、米国マサチューセッツ工科大学の創立は1861年、講義の開始は1865年である。工部大学校は、1886年、帝国大学発足の際に工科大学としてこれに統合されたが、帝国大学は工学部(工科大学)を有する世界最初の大学と云われる。なお工部大学校は、イギリス人ヘンリー・ダイヤーの指導の下に、スイスの連邦工科大学の体系的な教育をモデルに、イギリスの実践的教育も含めて計画されたと云われる。

技術者は自然界にないものを作り出すので、うっかりすると公衆に危害を及ぼす可能性がある。場合によっては倫理上の責任が生ずる可能性もある。技術者倫理は難しい問題である。また技術開発は殆どの場合、利益相反の問題である。すなわち、コストと性能、コストと安全性、コストと寿命、また与えられた時間的制限、等々。技術開発はなかなか難しい問題である。

科学研究のテーマは、科学者の興味によってのみ決められるべきであると云われる。これでこそ科学が学問といわれる所以であるとされる。しかし工学ではそうばかりは云ってられない。必要に迫られての研究も生じてくる。必ずしも経済上の必要のみならず、津波の研究のように人命保全の必要に迫られる研究もある。

日本学士院会員であったある先輩が、工学の唯一の欠点は役に立つことだ、役に立たなければ純粹の学問として工学はもっと尊敬されるだろう、と云っておられた。

しかし今日の日本の経済を支えているのはやはり技術と工学であり、これなしには日本は成り立たない。やはり役には立っても、技術、工学の研究者はそれに誇りを持って研究を続けて行かねばなるまい。

学士院の歩み 第12回 分科の設置

日本学士院は、明治6（1873）年に結成された近代の啓蒙学術団体である明六社を源流として明治12（1879）年に創設された東京学士会院を前身とします。東京学士会院は、明治39（1906）年に帝国学士院に改組し、昭和31（1956）年に現在の日本学士院となりました。このコーナーでは、130年を超える本院の歴史についてシリーズで紹介します。

帝国学士院は、明治39（1906）年に東京学士会院から改組した際、定員を40名から60名に増員するとともに、「第1部 哲学及社会的諸学科」「第2部 理学及应用諸学科」の2部制を創始した。その後、しばしば諸規則の改正を行って来たが、大正14（1925）年になり、定員の増員と分科の設置を行うに至った。

その端緒となったのは、大正13（1924）年7月に、会員選挙法並びに帝国学士院規程の改正に関する調査委員会設置が議題に挙げられたことである。同年11月、福田徳三会員（経済学）は、その提案理由として、現在の会員の補充方法は、1名の補欠会員を選挙するために数ヶ月を要し、しかも何人も満足する結果が得られない状態にあると述べた。（当時の選挙方法は、それぞれの部会で候補者を予選し、選ばれた3人の候補者について決選投票を行い、有効投票の3分の2以上かつ会員の過半数の投票を得た候補者を会員とするというものであった。）ついで、外国においては一国において複数の学士院が設けられている国があり、会員数も日本より多いが、日本においては帝国学士院のみであり、会員数も少ないことから代表のいない分野が生じ、授賞推薦等の事業を

実施するに当たり、それらの分野は選から漏れてしまうこと、また、学術の進歩により、現在の会員数では少数のきらいがあることから、会員数を増員し、各学科にわたる学者を網羅することにしたいということであった。

協議の結果、大正14（1925）年2月の総会で櫻井錠二幹事を始めとする7名の委員から構成される調査委員会が設置されることとなり、同年3月の総会に結果が報告された。その報告の内容は、①会員数を60名から100名に増員する、②部員数は第1部40名、第2部60名とする、③各部に分科を設ける、④会員選挙法は改正の必要を認めるが、分科の決定後、改正方法を検討する、というものであった。②については、第2部の方が分野が広く、全然代表のいない分野もあることから、第2部の数が多くされたものであったが、異論も出て、結局第1部と第2部は同数の50名ずつとされた。

分科の別については、各部で決議が行われ、第1部2分科、第2部5分科の計7分科となった（表1）。現在でも7つの分科から構成されているが（表2）、その内容は全く異なっている。

これらの改正案は文部大臣に上申され、勅令により帝国学士院規程改正が行われて会員の定員増が認められた。また、文部大臣より帝国学士院会則改正の認可があり、分科設置が実現した。

なお、大正14（1925）年には、休刊状態となっていた『Proceedings of the Imperial Academy』の定期刊行（年10回）も決定し、翌大正15（1926）年から実現された。以降、現在の『Proceedings of the Japan Academy』まで、引き続き刊行されている。

表1 大正14（1925）年の改正による分科及び定員

部	分科	分野	定員
第1部 (哲学及社会的諸学科)	第1分科	法律学・政治学・経済学	25
	第2分科	哲学・史学・文学	25
	小計		50
第2部 (理学及应用諸学科)	第1分科	星学・数学	7
	第2分科	物理学・化学	11
	第3分科	地球物理学・地質学	8
	第4分科	生物・医学	16
	第5分科	工学・農学	8
	小計		50
合計			100

表2 現在の分科及び定員

部	分科	分野	定員
第1部 (人文科学部門)	第1分科	文学・史学・哲学	30
	第2分科	法律学・政治学	24
	第3分科	経済学・商学	16
	小計		70
第2部 (自然科学部門)	第4分科	理学	31
	第5分科	工学	17
	第6分科	農学	12
	第7分科	医学・歯学・薬学	20
	小計		80
合計			150

第 66 回公開講演会レポート

平成 29 年 5 月 20 日(土)に徳島大学との共催により、第 66 回公開講演会を徳島市の徳島大学長井記念ホールにおいて開催しました。今回は、本庶 佑会員(京都大学高等研究院特別教授)が「免疫力でがんを治す」、野中郁次郎会員(一橋大学大学院国際企業戦略研究科特任教授、一橋大学名誉教授)が「知識創造によるソーシャル・イノベーションの実践」と題して講演を行いました。

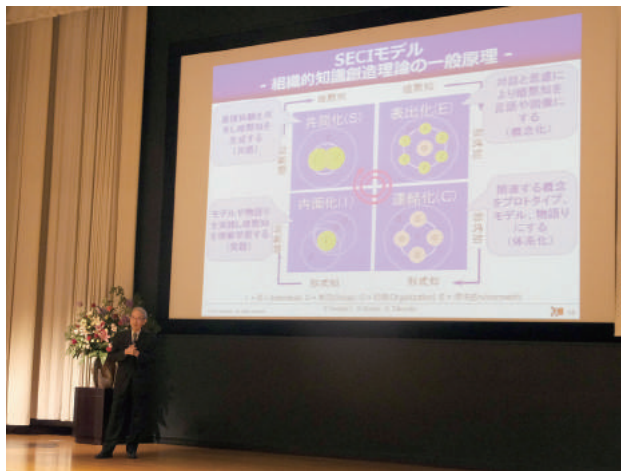
本庶会員は免疫応答にブレーキをかける物質である PD-1 の抗体を活用し免疫活性を増強すると、抗がん能力を示すという知見を元に、免疫機能を利用したがん治療が進んでいることやその特徴を説明しました。また、終わりには幸福とは何か、幸福のための医療とはどのよ

うなものかということまで話が及びました。野中会員は、21 世紀は知識創造者の時代であることや、自身の提唱した SECI モデルを紹介してイノベーションがいかにして起こるかを説明しました。その上で、ソーシャル・イノベーションの実践のためには共通善などが必要であることを説明し、企業や NPO の実践例を紹介しました。

講演終了後は活発な質疑応答がなされ、聴講者からは「研究に関しても勉強になったが、研究の思想、ポリシーに考えさせられた。」「基礎研究の重要性がわかった。」「ソーシャルイノベーションについて知識を得ることができた。」「具体的な取り組みの事例をもとにお話いただき勉強になった。」等の感想が寄せられました。



会場からの質問に答える本庶 佑会員



講演を行う野中郁次郎会員

J P タワー学術文化総合ミュージアム「インターメディアテク」特別展示のお知らせ

国際学士院連合(Union Académique Internationale; UAI) 総会が日本で初めて開催されることを記念して、J P タワー学術文化総合ミュージアムインターメディアテクにおいて特別展示『アカデミーの神髄——国際学士院連合の歩みと日本学士院』が行われます。

本展示では、人文社会科学分野の学術的な協同組織として名高い国際学士院連合の創設予備会議に帝国学士院(現在の日本学士院)が 1919 年に参加した際の報告書翰や、国際学士院連合の最初の事業として採択され、現在も継続する重要な史料編纂プロジェクト「古代甕瓶集成」による出版物などを厳選して取り上げ、国際学士院連合の歴史や現在の活動、その事業に対する日本学士院の貢献の一端を紹介します。

《開催日時》

平成 29 年 9 月 12 日～ 10 月 29 日

(開館日・開館時間はインターメディアテクに準じます。)

《会 場》

インターメディアテク PANTHEON

(東京都千代田区丸の内 2-7-2 KITTE2 階)

JR 東京駅丸ノ内南口から徒歩 1 分

東京メトロ丸ノ内線東京駅地下道より直結

主催 東京大学総合研究博物館・日本学士院

共催 国際学士院連合

Madeline H. Caviness 教授講演会のお知らせ

国際学士院連合（Union Académique Internationale; UAI）総会が日本で初めて開催されることを記念して、同連合名誉会長でもある米国のタフツ大学名誉教授マデリン・H・キャヴィネス博士にご講演いただきます。

《開催日時》

平成 29 年 10 月 21 日（土）午後 2 時～ 4 時

《会場》

日本学士院（東京都台東区上野公園 7-32）

《演題》

「14 世紀ドイツ法書（ザクセンシュペーゲル）に描かれた女性とマイノリティー」英語講演（同時通訳付き）

主催：日本学士院・東京大学大学院人文社会研究科美術

史学研究室

助成：公益財団法人 鹿島美術財団

申込方法：インターネット (https://ez-entry.jp/uai2017_1021/entry/) からお申込ください。

マデリン・H・キャヴィネス教授

1959 年ケンブリッジ大学卒業、1970 年 Ph.D.（ハーバード大学）。米国タフツ大学助教授・教授等を経て、現在、タフツ大学メアリー・リチャードソン名誉教授、カナダ・ラヴァル大学客員教授。国際哲学・人文学会議（CIPSH）会長、国際学士院連合会長、国際中世美術センター長、米国中世アカデミー会長等を歴任。専門は建築学、ステンドグラス、ジェンダー・女性研究。



Photo by Melanie Ko

第 12 回日韓学術フォーラム

大韓民国学術院との共同事業である第 12 回日韓学術フォーラムは、平成 29 年 9 月 20 日（水）～ 22 日（金）の 3 日間、ソウルにおいて開催されました。今回は本院より 9 名の会員が渡航・参加し、大韓民国学術院会員等を合わせて約 80 名の出席者がありました。

会員等はソウル到着後、夕刻には大韓民国学術院を訪問し、役員や関係会員と和やかに懇談しました。2 日目にはソウル国立大学校内の湖巖教授会館コンベンション・センターでフォーラムが行われました。

報告 1：趙東一（Cho, Dong Il）（大韓民国学術院会員、韓国古典文学）

「文学史の来歴と進路」

報告 2：塩川徹也（日本学士院会員、フランス文学）

「古典とクラシック—ことばとことがら」

報告 3：朴承禹（Park, Seung Woo）（大韓民国学術院会員、農業工学）

「気候変動に備えた農業用水管理政策」

報告 4：佐々木恵彦（日本学士院会員、森林資源科学・樹木生理学）

「森林減少と問題土壌」

報告終了後、全体討議では活発な質疑応答が行われ、報告者より丁寧な説明が行われました。最終日は、南山韓屋村を訪問しました。



フォーラム参加者の記念撮影



報告を行う塩川徹也会員

新第 2 部部長の選定

広中平祐第 2 部部長の任期満了に伴い、平成 29 年 9 月 12 日に第 2 部部長選挙を行い、井村裕夫会員（内科学）が選定されました。



『学問の山なみ』から—歴史をつくった会員—

130年を超える学士院の歴史の中で、500名以上の会員が選ばれました。このコーナーでは、物故会員追悼の辞を集めた『学問の山なみ』から毎回2名を紹介します。

高野岩三郎 たかの いわさぶろう

明治4(1871)年—昭和24(1949)年
大正14(1925)年帝国学士院会員選定



長崎県の生まれ。日本労働運動の創始者である兄・房太郎の援助を受け、東京帝国大学法科大学に進学し、ドイツ人エッケルトから統計学を学んだ。卒業後、文部省留学生としてドイツに赴き、ミュンヘン大学のマイアに統計学の指導を受けた。マイア

の統計学は、統計によって社会事象を解明することを目的とする社会統計学であり、高野はその学風を引き継いだ。帰国後、東京帝国大学法科大学の教授となり、日本初の統計学の講座を運営した。また、大正8(1919)年に東京帝国大学法学部から経済学部が独立する際にはその中心となった。

高野は、統計によって解明すべき社会真理については、それが社会批判の武器、社会正義の確立のためであることを強く考え、主張し、またその立場で研究した。大正

5(1916)年に行った「東京における二十職工家計調査」は日本初の家計調査であり、大正8(1919)年には「月島労働者家計調査」や「東京及び付近小学校教員家計調査」を指導し、後年、この種の諸調査の礎石となった。毎年2、3の論文を著し、それらは人口及び経済の実証的な諸研究のモデルとなった。論文集『統計学研究』と『わが国人口の現在及び将来』は社会問題についての実証的精神に貫かれていた。

大正8(1919)年に国際会議に日本が初めて労働組合の代表を送ることとなった際、政府は高野を代表者として定めたが、労働者団体である友愛会は同会による互選を主張し、板挟みとなった。高野は友愛会の意見を尊重して代表者を辞任し、一方で官吏としての責任に反するとして教授の地位を辞した。大正9(1920)年には大原社会問題研究所の創設に関わり、世界各国の労働運動、社会運動の資料を集めて、世界有数の専門図書館に整備するとともに、多くの研究者を育成した。この時代には、統計学に関する世界の古典を翻訳し網羅した『統計学古典選集』16巻を編集した。

昭和21(1946)年には日本放送協会(NHK)の会長に就任し、その民主化に貢献した。また、昭和23(1948)年には日本統計学会初代会長に選ばれた。

高橋誠一郎 たかはし せいいちろう

明治17(1884)年—昭和57(1982)年
昭和22(1947)年日本学士院会員選定



新潟県の生まれ。明治41(1908)年慶應義塾大学学部本科政治科を卒業し、明治44(1911)年経済原論及び経済学史研究のため、ロンドンに留学した。大英博物館図書室、ゴールドスミス経済文献図書館で17・18世紀の文献を渉猟し、

古書店で古版本を探索したが、病を得て帰国した。回復後の大正3(1914)年に慶應義塾大学に出講し、経済原論と経済学史を担当し、後に慶應義塾図書館長や経済学部長、慶應義塾長代理を務めた。退任後も講師として最晩年まで教壇に立ったという。

学問上の業績として、経済学史関係の大部の著作を多数出版した。大正9(1920)年著の『経済学史研究』は、1120ページの大冊で、経済学成立前のヨーロッパ経済思想の研究であった。高橋は、研究に当たっては、翻刻

本よりも原版で読む方が出版当時を想見できると思うし、翻刻本は校訂者の意見や無責任な誤写誤植によって汚損された場合が少なくないことに留意すべきであると説いた。昭和7(1932)年刊行の『重商主義経済学説研究』は、主としてイギリス重商主義時代の経済思想及び学説を祖述したものであり、アダム・スミス等の古典派経済学説が重商主義経済学説に根ざすこと、富と貨幣の区別、貨幣過剰の影響、貿易平衡論、国際分業論等が重商主義者の間に芽生えて発展していったことを追求した。戦時下の昭和18(1943)年に刊行された『古版西洋経済書解題』は35篇の経済稀覯書に詳細な書誌学的・学説的解説を施したものである。その他にも、多くの著書を上梓している。

経済学だけでなく、文化面でも業績を挙げ、昭和22(1947)年から9ヶ月間文部大臣を務め、教育基本法や学校教育法の制定に関わったほか、日本芸術院の初代院長、国立博物館長、文化財保護委員会委員長、初代日本舞踊協会長、初代映倫管理委員長、国立芸術劇場初代会長などを務めた。浮世絵収集家として有名で錦絵以前の原始浮世絵から明和、寛政、文化文政、明治期に至るまで幅広く渉猟した。この面では『浮世絵二百五十年』、『高橋誠一郎コレクション・浮世絵(全7巻)』を著している。

第 67 回公開講演会のお知らせ

第 67 回公開講演会を日本学士院において開催します。
下記まで事前にお申込みください。(定員 150 名)

《講 演》

玉泉八州男会員 (東京工業大学名誉教授)

「シェイクスピアのロンドン—過ぎゆくもの、変わるもの—」

森 謙治会員 (東京大学名誉教授・東洋合成工業 (株) 顧問・理化学研究所客員主管研究員)

「幼若ホルモンとフェロモンの話—化学で解き明かされる昆虫のくらし—」

《開催日時》

平成 29 年 10 月 28 日 (土) 午後 2 時～5 時 10 分

《会 場》

日本学士院 (東京都台東区上野公園 7-3 2)



玉泉八州男会員



森 謙治会員

〈申込方法〉

日本学士院ホームページの専用フォームから、またはメール (gkkouen@mext.go.jp)、FAX (03-3822-2105)、往復はがきのいずれかの方法で必要事項を記入の上、お申込みください。

〈必要事項〉

メール・FAX の場合、「公開講演会聴講希望」と明記の上、氏名 (ふりがな)、住所、電話番号等連絡先を記載。

第 10 回学びのススメシリーズ講演会のお知らせ

本講演会は、様々な分野で素晴らしい研究を重ねてきた日本学士院会員が、日本の将来の担い手となる子どもたちに知ることのおもしろさ、学ぶことの楽しさを知ってもらおう一助になればという思いから企画されました。

「宇宙の始まりに迫る！ —遠くを観測すれば過去が見える宇宙研究の楽しさ—」

佐藤勝彦会員 (日本学術振興会学術システム研究センター所長、東京大学名誉教授)

《日 時》

平成 29 年 12 月 16 日 (土) 午後 2 時 30 分～

《会 場》

日本学士院 (東京都台東区上野公園 7-3 2)

《対 象》

中学生・高校生・一般 (定員 150 名)

私たちの住むこの宇宙は今から 138 億年前に火の玉として始まったと考えられています。ビッグバンとして始まった宇宙は膨張とともに温度が下がり、ガスが凝集して銀河や恒星、そして地球のような惑星が形成されたと考えられています。今、地球に誕生した生命、人類は高度な科学と技術を発展させ、宇宙がどのように始まっ

たのか、そして現在の美しい宇宙が形成されたのか、物理学の理論や人工衛星や大型望遠鏡などハイテク技術を駆使して描き出そうとしています。宇宙では光や電波で遠くを観測すれば過去が見えてきます。

光といえども有限の速さで伝わってくるので、今遠くからやってきている光は昔の時代に生じたものだからです。今、天文学は宇宙の始まり、「ビッグバンがなぜ、どのように起こったのか」という究極の疑問にもチャレンジしています。最新の研究をわかりやすく紹介します。

〈申込方法〉

日本学士院ホームページの専用フォームから、またはメール (gkkouen2@mext.go.jp)、FAX (03-3822-2105)、往復はがきのいずれかの方法で必要事項を記入の上、お申込みください。

〈必要事項〉

メール・FAX の場合、「学びのススメ聴講希望」と明記の上、氏名 (ふりがな)、住所、電話番号、メールアドレス、中学生/高校生/一般の別を記載。



会員・客員の逝去

次の方々が逝去されました。

河本一郎 会員 平成29年4月18日 享年94歳
(第2分科・商法・証券取引法専攻)

中川久定 会員 平成29年6月18日 享年86歳
(第1分科・フランス文学・思想史専攻)

岩崎英二郎 会員 平成29年7月11日 享年95歳
(第1分科・ドイツ語学専攻)

William Theodore De Bary 客員 平成29年7月14日 享年97歳(米国・儒教哲学・日本思想史専攻)

会員の近刊紹介

- ・吉川忠夫『六朝貴族の世界 王羲之 新訂版』清水書院、平成29年4月
- ・東野治之『聖徳太子ほんとうの姿を求めて』(岩波ジュニア新書) 岩波書店、平成29年4月
- ・田代和生(編集・校注)『近世日朝交流史料叢書I 通訳酬酢』ゆまに書房、平成29年9月
- ・樋口陽一『時代と学問と人間と 追想のなかの恩師・知友たち』青林書院、平成29年6月
- ・樋口陽一他(編)『憲法の尊厳 奥平憲法学の継承と展開』日本評論社、平成29年5月
- ・龍田 節・前田雅弘『会社法大要 第2版』有斐閣、平成29年5月
- ・菅野和夫・荒木尚志(編)『解雇ルールと紛争解決 10カ国の国際比較』労働政策研究・研修機構、平成29年4月
- ・芹川洋一・佐々木 毅『政治を動かすメディア』東京大学出版会、平成29年5月
- ・佐藤幸治・泉 徳治(編)『滝井繁男先生追悼論集 行政訴訟の活発化と国民の権利重視の行政へ』日本評論社、平成29年7月
- ・野中郁次郎『知的機動力の本質 アメリカ海兵隊の組織論的研究』中央公論新社、平成29年5月
- ・野中郁次郎『本田宗一郎 夢を追い続けた知的バーリアン』PHP 研究所、平成29年5月
- ・野中郁次郎・西原文乃『イノベーションを起こす組織 革新的サービス成功の本質』日経 BP 社、平成29年7月
- ・大澤文夫『「生きものらしさ」をもとめて』藤原書店、平成29年4月
- ・大村 智『ストックホルムへの廻り道 私の履歴書』日本経済新聞出版社、平成29年9月
- ・佐藤勝彦『ますます眠れなくなる宇宙のはなし 「地球

外生命』は存在するのか』(宝島SUGOI文庫)、宝島社、平成29年7月

- ・佐藤勝彦・長崎訓子『絵本 眠れなくなる宇宙といのちのはなし』講談社、平成29年8月

編集後記

第20号ニュースレターでは、日本学士院第107回授賞式の報告及び受賞者からの寄稿、会員からの寄稿のほか、日韓学術フォーラム報告、公開講演会レポートなどを掲載しています。ご寄稿いただきました先生方には心より御礼申し上げます。

また、今号では10月下旬に学士院会館で開催される第89回国際学士院連合総会を記念しての同連合名誉会長のキャヴィネス博士による講演会(P.9)及び東京大学総合研究博物館のご協力による「インターメディアテク」での特別展示(P.8)についてお知らせしています。日本学士院は大正9(1920)年1月の第1回同連合総会から参加していますが、総会が日本で開催されるのは今回が初めてとなります。キャヴィネス博士の講演会は専門的なお話になるかと思いますが、特別展示は歴史的な貴重資料等の公開となりますので、ぜひご覧いただければ幸いです。

さて、今年の東京の夏は40年ぶりの長雨でしたが、上野公園は連日多くの人で賑わっていました。7月中旬の新聞で、JR東日本管内の2016年度の1日平均乗車人数ランキングという記事を目にしましたので、参考に上野駅を調べてみたところ13位(182,693人)という結果でした。ちなみに「インターメディアテク」の最寄り駅の東京駅は3位(439,554人)で、1位新宿駅、2位池袋駅となっています。JR上野駅公園口周辺の整備も進んでいますので、2020年7月の完成が楽しみです。

最後に、日本学士院では毎年、一般の方々を対象とした「公開講演会」と中学生・高校生を主な対象とした「学びのススメシリーズ講演会」を開催しています(P.11)。皆様のご参加をお待ちしております。(H)

◎お問合せ先

日本学士院

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32

電話：(03)3822-2101

FAX：(03)3822-2105

E-mail：gkjimu@mext.go.jp

第20号：発行日：平成29年10月11日

(年2回 4月、10月発行)

ホームページもご覧ください。

<http://www.japan-acad.go.jp/>